

明日への力

日本総合研究所

創発戦略センター

エキスパート 井上 岳一

69



武蔵野美術大学と日本総合研究所(以下、日本総研)は、昨年十一月、武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス内に、共同研究拠点「自律協生スタジオ」を開設した。美術大学とシンクタンクの協働は世界にも類を見ない珍しい取り組みだ。共同研究拠点を「スタジオ」と名付けたのは、研究で終わらせずに実践に結びつけたいとの思いがあったからだ。ここでの実践とは、「自律協生社会の実

現」に向けた取り組みのことを指す。

「自律協生社会」という耳慣れない言葉は、日本総研の造語である。「自律的・主体的に生きる個が、他者や自然やテクノロジーと力を合わせる中で生まれる、生き生きとした喜びに満ちた社会」を指し、具体的に以下の三つのキーワードで特徴づけられる。一つ目は「自律」だ。社会の成員が、依存や支配から自由になり、主体的に生きる社会であること。また、多様な地域のそれぞれが主体的に生きる自律分散的な社会

美術大学との「自律協生社会」実現に向けた取り組み

市ヶ谷の共同研究拠点「自律協生スタジオ」が始動

になること。二つ目が「協生」だ。人口減少の中で社会を維持発展させるには、これまで

複を承知で、あえて自律協生社会を特徴づける言葉として挙げた。

ない協力、力合わせが必要になる。縦割りの業界・組織構造に横串を通し、世代や地域の壁を越えた協力関係を生むことが必要

ちようど半世紀前、イリイチは、産業化された社会におけるコンウェイウィアリティの喪失を問題視した。産業社会では、人々の相互依存でまかなわれてきたことが、専門家

だ。新たな官民連携の仕組みも求められる。そして、三つ目がコンウェイウィアリティだ。コンウェイウィアリティは、「共に生きる喜び」を原義とする。今は、宴会、陽気などの意味で使われる。この言葉を、思想家のイ

ヴァン・イリイチは「人々の間の自律的で創造的な交わりと人格的な相互依存のうちに実現される個人の自由と喜び」という意味で用いた。詳しくは彼の著書「コンウェイウィアリティのための道具」を参照のこと。「自律協生」は、実はこのコンウェイウィアリティの訳語である。「自立共生」と訳されてきたが、イリイチの意をくみ「自律協生」と訳し直している。ただし、「自律協生」では、コンウェイウィアリティがはらむ和気あいあいとした感じや祝祭感が伝わらない。そこで重

この依存構造から脱し、自律協生社会を実現するために何をすべきか。それを研究し、実践することが自律協生スタジオのミッションだ。研究活動の一環として、企業と共に自律協生社会のあり方を研究する研究会「コンウェイウィラボ」を立ち上げたところだ。「自律協生的な組織や働き方について考えたい」「事務機器メーカー」「地方と自律協生の関係を築きたい」「小売チェーン」「自律協生のコミュニティをつくりたい」「ハウスメーカー」「自律協生をまちづくりに応用したい」「鉄道、建設」等々、参加企業の関心はさまざまだ。武蔵野美術大学の学生も参加する、異業種、異世代からなるラボである。既に参加企業同士で協業の話が進むなど、ラボ自体が自律協生の実験場として、コンウェイウィアルな場になっている。

参加条件は特にない。自律協生社会の実現に関心のある企業なら誰でも参加できる。個別に深めたいテーマがあれば、自律協生スタジオと共同研究を立ち上げることも可能だ。自律協生スタジオは、広く社会に門戸を開いている。

(自律協生スタジオの活動やラボへの参加に関心のある方は、「」報ください。)

*記事に関するお問い合わせは、ml.jri.co.jpまでお願い致します。